



母の家計簿を読む

会員 保高 睦美 (69期)

実家の不動産の購入価格を知る必要が生じ、資料を探していると、母が押し入れの中から茶色に変色した一冊の大学ノートを出してきた。昭和43（1968）年から昭和60（1985）年まで断続的に付けられた母の家計簿だった。

バラバラになりそうな背表紙をセロハンテープで止めてあるそのノートには、収入や支出がボールペンの小さな文字で細々と記載されていた＝写真＝。不動産価格調査はそっちのけ、家計簿が語る物語に引き込まれた。

上がる給料

まずは父の月給。昭和43年には手取りで約3万円、それがオイルショック後の昭和50（1975）年には3倍以上の10万円、定年間近（当時は50歳代で定年が一般的だった）の昭和60年には25万円ほどになっていた。

食料品の値段

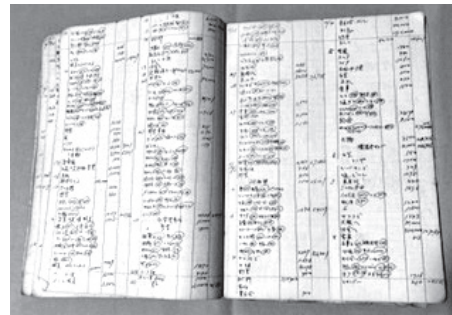
昭和50年代は、スーパーマーケットで食料品を買うことが増え、次第に支払いにクレジットカードを使うことが多くなっていく。

大根1本は100～150円くらい。卵（10個パック）や牛乳（1リットル）は、どちらも、200円前後で現在とあまり変わらない値段だったようだ。米は、「10キロ3455円」などと毎回定額が記載されているから、おそらく標準価格米（特定の銘柄米ではなく、行政指導によって価格が定められた標準的な米）だと思う。現在では銘柄米が同じくらいの値段で手に入るようになっている。

教育費の負担と両親の思い

年を追って増加するのが教育費である。

私が通っていた私立文系大学の授業料が年間37万円。令和3年度の私立文系学部の授業料平均約82万円（文部科学省調査）に比べれば半分以下だが、同時に私立大学に2人、私立高校に1人を通わせるとなると大変だ。



母は私が小学生のころから時間があればパートに出ており、昭和50年代の後半には月に7万円から8万円を家計に入れ、学費を含む生活費をまかなっていた。時給は480円（昭和58年）である。母はよく「大学は休みが多すぎる」と憤っていたものだ。

両親とも戦後の混乱の中で上の学校に行きたくても行けなかった世代である。「子どもには十分な教育を」というのが一致した思いだったのであろう。

二槽式洗濯機

家計簿も終盤。

昭和60年、私は就職して家を出た。社会人になるというのに、なんと3月の家計簿には「睦美の冷蔵庫」「レンジ」「洗濯機」の文字がある。一応言う、私は「自分で買う」と言ったのだが、母が「いいの。私が買う」と言って用意してくれたのである。これでやっと手が離れる、締めくくりということだったのだろうか。

この洗濯機（1万9800円）、平成28年までの31年間、我が家で働き続けた。当時は修習中。同期の20歳代の修習生に「とうとう二槽式洗濯機を買って替えるんだ」と話すと、「ニソウシキ？…あ、上が乾燥機で下が洗濯機ですね。僕のうちの洗濯機は洗濯から乾燥までボタン一つですべてできますよ」。ムムム。「二層式」と思ったか。思わぬところで世代ギャップを感じるエピソードまで加わった。念のため付け加えると、二槽式とは、洗濯槽と脱水槽が分かれた洗濯機で昭和では主流だった。

一冊の家計簿をめぐる物語、短いブレイクタイムでは読み切れそうもない。